

アジア大陸の北半分、そのうち西はウラル山脈から、東は太平洋へ流れこむ河川の分水界となつているヴェルホヤンスク山脈などまでの地域は、シベリアと呼ばれている。このシベリアは中央を流れるエニセイ川によつてさらに西シベリア、東シベリアと分けられ、緯度線に沿つて、北からツンドラ、タイガ、ステップという自然帯に分類される。

シベリアは、アジア大陸全体のほぼ半分ちかい広さがあるが、その大半を占めるのが、北緯五十度から七十度までのタイガ地帯である。日本語では「針葉樹林帯」と訳されるこの地域は大陸型の気候で、冬はマイナス五十度近くまで気温が下がり、夏は四十度を超えることもある。

東シベリアの南部、モンゴルとの国境近くにはバイカル湖が広がっている。タタール語で「豊かな湖」を意味し、その水量は地球上の淡水の二割を占めるといふ廣大で深い湖だ。最深部の水深は千六百メートルに達し、世界遺産にも登録されている。

バイカル湖の北端には、シベリア鉄道から分岐するバム鉄道の駅、セーヴェロバイカリスクがある。そこから六百キロほど北西に小さな町があつた。中央シベリア平原の南端に近く、シベリア有数の工業都市イルクーツクからは、直線で約七百五十キロの距離である。

一九〇四年、この町で不可解なできごとが起こつた。一夜にしてこの町で飼われていた多数の

獺犬と牛、羊などの家畜が数百頭、死亡したのである。その四年後の一九〇八年には、天然痘が流行し、近隣の町と合わせて五百人近い死者がでた。

その原因を、当時のロシア人は「あるもの」の仕業である、と考えた。伝説、伝承の類には多く登場する、その「あるもの」だが、奇妙なことに東方正教会では聖者に列せられている。

ちなみに東方正教会とは、キリスト教の、カトリック、プロテスタントと並ぶ三大宗派のひとつで、ロシア正教も含まれる。

ロシア正教は、千年にわたって、カトリックともプロテスタントともちがう、独自の発展を上げてきた。スラヴ民族の精神的な支えであると同時に、ロシアの文化、特に芸術には大きな影響を与えた。

ロシア正教会の独特な屋根の形は、「ねぎ坊主」と呼ばれる球形、らせん状をしている。内部には「イコノスタス」という、イコンの描かれた壁が広がっている。その壁は、聖職者と信者たちの席、至聖所と聖所をへだてるためのもので、至聖所には聖職者しか入れないきまりがある。

イコンは、ロシア語では「イコーナ」、平らな板にテンペラ絵の具で主キリストや聖母マリア、あるいは聖者たちを描いた「聖像画」である。

聖書には偶像崇拜を否定する記述があり、そのことがイコンを平面像にとどめている。

かつてのロシア、そして今でも信仰心の篤いロシア人の家庭では、部屋の入り口から正面にあたる壁の東側の隅にイコンを飾るのがあたり前の習慣としてあった。

イコンは宗教的な意味をもつと同時に、民衆の生活に根付いた芸術でもある。当然、教会には多くのイコンが飾られることになる。

信仰と深くかわる存在であるがゆえに、イコンそのものにも、多くの伝説が生まれている。

有名なのは「ウラジーミルの生神女」と呼ばれるイコンで、七世紀初頭、ビザンティンの帝都コンスタンティノープルがペルシャ人によって包囲・攻撃された際に、このイコンを掲げた総主教らの祈りによつて撃退した、というものだ。また、九世紀の半ばには、イスラムの圧力をうけたコプト教会の修道院で、イコンに描かれた聖者たちがいつせいはらはらと涙を流した、といういくつかの伝説もある。

現代にいたつても、イコンに描かれた聖者の目から血が滴った、とか、キリストの姿から光が放たれた、という報告は、枚挙に暇がない。

一方で、人を死に追いやる、といわれたイコンも存在する。ロシア、サンクトペテルブルクのエルミタージュ美術館におさめられていたキリストのイコンが、館員数名を死にいたらしめたという理由で、展示を中止されている。

いずれにしても、イコンそのものは、図案が決められており、そこに作者の名が記されることは決していない。

バイカル湖の北にある小さな町で災厄をもたらした、といわれている「あるもの」も聖者である以上、姿を描いたイコンが存在して不思議はなかった。

しかし、その「あるもの」を描いたイコンを目にした者は少ない。災厄の起きた町の教会に飾られていたという噂はあるが、真偽は不明だ。

ただ起こった災厄と「あるもの」のあいだには関係がある、と信じる人々には根拠があった。それは聖者の暦である。聖者に列せられた者は、その命日をもって天国に向かうと考えられた。

したがって多くの聖者が列せられる現在、一年三百六十五日、何月何日であっても、その日は聖者の誰かの記念日にあたる。複数の聖者が重なることも少なくない。

ヨーロッパでは、カレンダーに毎日、その日の聖者の名が記されていたりする。一九〇四年に起こった災厄が、民衆にそのかわりを疑われた聖者は当日が彼の記念日であったことが大きな理由となった。

他の聖者と彼の記念日はちがっていた。他の聖者は、たとえばその日が複数の聖者による共通の記念日であろうと、毎年必ずやってくる。

しかし彼だけは、毎年、記念日を迎えることができないのだ。

記念日は二月二十九日。四年に一度しかやってこない。それは神が決めたことで、その理由は、彼が無慈悲な態度を民衆にとつたからだという。

彼は「邪眼」のもち主だともいわれ、ふだんは長い睫毛でその眼をおおい隠しているが、四年に一度、閏年の二月二十九日に限り、睫毛をあげて、あたりを見回す。そのとき彼にいらまれた者は、ことごとく滅びる。したがって、二月二十九日は決して外出してはならないという伝承が、ウクライナ地方にはある。

また、彼は悪霊との取引に応じてサタンの側につき、神がサタンとその眷属を地獄に落とすつもりであると、密告した。その罪によって、彼は鎖につながれ、三年のあいだ天使によって重い槌で額を打ちつけられ、四年目にようやく解放を神によって許された、ともいわれている。

別のいいつたえでは、彼は「地獄の門番」で、四年に一度しか休暇が与えられない。

あるいは、彼はすべての風を統べる存在で、ときに強風を放って、人間と家畜に疫病をもたら

す。

いずれにしても、聖者としては、異端な存在である。

だが、閏年の災厄からも百年がたち、人々は彼の名を忘れ始めていた。

彼の名は聖ヨハネス・カッサヌス。ロシア名を、カシアンといった。

## 2

教会につづく道は、車一台がようやく通れる幅だけが雪かきをされていた。借りた日本製の4WDを進め、リハチエフは教会のかたわらでブレーキを踏んだ。体は疲れているが、頭は冴えていた。イルクーツクからの長い運転に備え、メタンフェタミンの錠剤を飲んだからだ。わずかに頭痛がするが、ハッシシを一服すれば吹きとぶだろう。

サイドブレーキをひき、エンジンをかけたまま車を降りると、待ちかねていたように教会の扉が開いた。

「アンドレイ！」

黒衣を着け、長くあごヒゲをのびした司祭の叫びは、まっ白な息にかわった。

「ユーリ！」

リハチエフは叫び返し、二人は教会の戸口で抱きあつた。

「久しぶりだ。よくきてくれた。私は、お前がもう——」

いいかけ、司祭は口ごもった。かわりに胸に吊るした十字架をまさぐった。

「死んでいると思った、か」

リハチエフはいい、教会の扉を閉めた。古く天井の高い教会の建物は冷えていたが、それでも外に比べれば、何十度も暖かい。

「悪い仲間に入ったと聞いていたから……」

リハチエフは手を広げた。くるりと一回転してみせる。

「俺はこの通りさ。びんびんしてる。お前こそ、こんな田舎で何をしている」

二人は幼馴染みだった。イルクーツクの工業団地にあった国営アパートで育ったのだ。リハチエフが“大物”を夢見てモスクワにでていった頃、ユーリはプスコフの修道院で修行に明け暮れていた。

ユーリは弱々しい笑みを浮かべた。

「結婚したんだ。好きな人ができてね。それで修道士はあきらめた。今は司祭としてこの教区を任されているんだ。妻もクラスノヤルスクの出身で、それほど遠くはないし……」

「そうかい。そいつはおめでどう。で、いったい俺に何をしてもらいたいんだ。電話じゃ、頼みがあるといっていたが」

共通の幼馴染みを通じて、ユーリはリハチエフの携帯電話の番号を調べ、電話をしてきたのだ。ユーリから連絡をもらったとき、リハチエフはモスクワにいた。だがひと月後、ウラジオストクにいく仕事があった。だからその旅の途中で寄る、とユーリに約束したのだ。

ユーリは頷いた。

「今、あれをとってくる。お前が間に合ってくれてよかった。ここで待っていてくれ」

ユーリは僧衣の裾をひるがえし、教会の建物の奥へと歩いていった。

「あれって何だ」

リハチエフがその背中に問いかけても、ユーリは答えなかった。リハチエフは息を吐き、ひとり残された教会の内部を見回した。

無数のロウソクに火が点り、淡い光を投げかけている。煙草を吸いたかったが、さすがにそれは我慢した。教会の内部に足を踏み入れたことなど、もう何年もなかった。

壁には無数のイコンが飾られ、ロウソクの光にゆらめいている。

一枚の巨大なイコンに目がいった。不気味な絵柄だ。同じ図案を、小学校の美術の教科書で見ただ覚えがあった。

確か、「天国の梯子」とかいう題名だった。

リハチエフはイコンに歩みより、目をこらした。絵の左下から右上に向かって、対角線状に長い梯子がかかっている。三十段ほどのその梯子を、十人以上の修道士が登っていた。そして梯子をはさんだ右上には無数の天使が飛び、左下には悪魔がいる。

神の国をめざす修道士を天使たちは励まし、悪魔たちは誘惑する、というわけだ。誘惑に負けた修道士は梯子からまっさかさまに落ち、悪魔たちに喰われている。悪魔は頭に角を生やし、まるで巨大な昆虫のような奴もいる。

角と羽だ。天使には羽が、悪魔には角が生えている。

この悪魔にそっくりな奴を、リハチエフは見たことがあった。リハチエフの組織が取引をするヒドチエンコファミリーのメンバーで、通称「ロックマン」と呼ばれている男だ。ガリガリに瘦

せているくせに全身に刺青を入れ、そのせいで内臓でも悪いのか、顔がどす黒い。目がひどく窪んでいるので、額がとびだしていて、まるで角のように見える。

二、三度、取引で顔を合わせたことがあるが、ほとんど口をきかなかった。いつもポケットに銃をいれていて、ささいなことで相手を撃ち殺す、といわれていた。

「ロックマン、こんなところで何やってるんだ」

リハチエフはアイコンに語りかけた。ロックマンは答えない。梯子から落ちてきた修道士の両腕をつかみ、まるで左右に引き裂こうとしているかのようだ。

リハチエフは首をふった。本物のロックマンも、このアイコンのように、絵の中に閉じこめられてしまえばいいのだ。奴から見れば自分はそのチンピラだろうが、人を殺してまでのしあがりたとは思わない。

ロックマンが殺した人間の数は片手では足りない、といわれていた。

「——アンドレイ、すまなかった」

声にびっくりして、リハチエフはふりかえった。ユーリがひと抱えもある、大きな包みを胸に抱えて戻ってきたのだ。

包みは白い布でおおわれ、その周囲を鎖がぐるぐる巻きにしていた。

「何だ、それは」

訊ねたりハチエフに、ユーリは首をふった。

「訊かないでくれ。頼みというのは、何もいわず、これを海に沈めてほしいんだ。二月二十九日がくる前に」

「二月二十九日？」

リハチエフは訊き返した。今年は閏年で、ギリシヤではオリンピックが開かれる。二月二十九日は一週間後だった。

「そうだ。二月二十九日を迎える前に、海に沈めるんだ。船でよく日本に行く、そういつていたろう？」

「ああ」

リハチエフは頷いた。確かにウラジオストックからトヤマや、サハリンからオタル、ワツカナイに行くことは多かった。いずれも向こうで中古車屋をやっている。パキスタン人との取引を監督するためだ。組織は、パキスタン人から日本車を買いつけ、代金のかわりにカニやウニ、エビなどを卸す。それらの“商品”は、パキスタン人に車をおさめている日本のヤクザが代金として受けとるのだ。ときには海産物のかわりに、ウラジオストックで朝鮮民族系のマフィアから仕入れるメタンフェタミンやマカロフ拳銃を送ることもあった。

ウラジオストックは、中国、北朝鮮との国境に近く、北朝鮮の工場で作られたメタンフェタミンが大量に流れこむ。最近ではカフェインと合成したMDMAという錠剤も、日本では高く売れるというので増えてきていた。今回の仕事も実は、MDMAの積みだしが目的だった。ウラジオストックの倉庫にあるMDMAをトヤマいきの船にのせ、パキスタン人に渡すのがリハチエフの仕事だ。

「確かに船に乗る」

「いつだ？」

「予定では二十八日だ」

リハチエフが答えると、ユーリはほっとしたように息を吐いた。

「よかった。それなら間に合う」

「海じやなきや駄目なのか。わざわざ船に乗らなくてもバイカル湖があるじゃないか」

「いったらう。二月二十九日までに沈めなきやならないんだ。どうやってバイカル湖に沈める？」

リハチエフは肩をすくめた。バイカル湖は五月いっぱいまで結氷し、その厚さは一メートルにも達する。二月の今、湖に沈めるのは確かに不可能だ。

「しかしなぜ二月二十九日まででなければならぬんだ？」

「あの日だからだ」

「あの日？」

ユーリの手が再び十字架をまさぐった。それだけでは足りず、三本の指で十字を切った。

「百年前、恐ろしいできごとがここであつた。それをくり返さないためだ。百年後の今年、あれはきつとよみがえる」

「何をいつている？」

ユーリはそつと包みを床におろした。

「頼む、アンドレイ。これ以上は訊かないで、私の頼みを聞き入れてくれ。教区の人々の平穏な暮らしを守るのが、私の務めなのだ。まさか、これがここにまだあつたとは、私も夢にも思わなかつたのだ」

「まさかヤバイブツなのじゃないだろうな。有害物質で汚染している、とか」

ソヴィエト連邦が崩壊し、核弾頭を含む、多くの大量破壊兵器が、ロシアでは行方不明になっている。軍やKGBの大物たちが金のために武器商人に売っぱらつたのだ。

「そういうものではない」

ユーリは首をふった。

「もてはわかる。ただし、決して包みを開けては駄目だ」

リハチエフは恐る恐る、包みを手にとつた。見かけほどの重さはない。むしろあつけないほど軽かつた。巻きつけられた鎖がなかつたら、片手でももてるだろう。硬い四角形をした板のような手触りだ。

「なんだ、軽いな」

「軽いからといって、侮つてはならない。それには災厄が詰まっている」

ユーリはいい、またすばやく十字を切った。

「わかつた。こいつを、船から海の中に叩きこめばいいんだな」

ユーリは頷いた。

「なるべく深いところで。そして誰もこないところで」

「引き上げた」

リハチエフは腕時計を見た。今夜はブラーツクに泊まる予定だつた。そして明日の夕刻、イルクーツク駅の二階の有料待合室で若頭のワシリーと落ち合うことになっていた。シベリア鉄道でウラジオストクに向かうのだ。

「じゃ、俺はいくよ」  
リハチエフはいった。

「ありがとう。ありがとう、アンドレイ。父と子と精霊の加護がお前にありますように」  
ユーリは頷いた。

「任せておけ。幼馴染みの頼みを断るわけではないじゃないか」

「日本からはいつ戻ってくる？」

「三月の初め頃だ。たぶん、四日か五日」

「じゃあその頃に電話する。うまくいったかどうか」

リハチエフは包みを抱え、教会の出入り口に向かった。ユーリが小走りで追いこし、扉を開け、支えた。

止んでいた雪がまた降りだしていた。暖かな4WDの車内に入ると、リハチエフはほっとため息を吐いた。そして包みを助手席におき、サイドブレーキをおろした。

### 3

リハチエフはいらついていて。待ち合わせの時間はとうに過ぎていくというのに、ワシリーがこないからだった。イルクーツク駅の二階には、豪華な有料待合室があって、ワシリーはそこに本来なら二時間も前に着いていなければならないのだ。

ワシリーと落ちあつたら、二人はシベリア鉄道のロシア号に乗りこみ、終点のウラジオストク

に向かう手筈だった。そのロシア号の到着時間が迫っている。

ワシリーの携帯電話には何度も連絡を試みた。だが、いっこうにつながらない。

やがて一時間遅れでロシア号が到着し、そしてでていった。

いったいどうなっているのだ。

だがじたばたしても始まらない。組織の仕事に、手ちがいや急な変更はつきものだ。内務省や対立する組織がちよっかいをだしてくることもある。そのたびにおろしていたら、小物と馬鹿にされるだけだ。だからワシリー以外の組織の人間には、電話はかけなかった。

約束から三時間も経過した頃、ようやくリハチエフの携帯電話が鳴った。液晶が表示した番号を見て、リハチエフはびっくりした。ボスのポリソビッチの携帯電話からだった。

「リハチエフです」

「アンドレイか、手ちがいがあった」

リハチエフが応じるなり、ボスはいった。

「ワシリーが裏切った。取引のことを内務省に密告したんだ」

「えっ」

リハチエフは立ちあがった。待合室にいた客の多くは、ロシア号に乗りこみ、いなくなっていた。だがまだ何人かはいらる。その連中の目と耳から逃れるため、部屋の隅に立った。

「どうして」

「そんなことが俺にわかるわけがない。とにかく、ウラジオストクにはいくな。警官どもが待ちかまえている筈だ」

ボス是不機嫌な声でいった。

「どうすればいいんです」

「飛行機に乗れ。ユジノサハリンスクに飛ぶんだ。そこで別のブツを受けとって、ホルムスクからオタルいきの船に乗るんだ。オタルに着いたら、アーザムというパキスタン人が迎えにくる」

「ユジノサハリンスクでは誰からブツを受けとるんですか」

「イワンコフだ」

その名を聞いて、リハチェフは目の前が暗くなるのを感じた。イワンコフは「ロックマン」の本名だった。

ユジノサハリンスクは、凍てついた風が吹き抜ける街だった。

国内線のターミナルからリハチェフがでてくるのを、トヨタのセダンが待っていた。運転席にはまぎれもなくロックマンの顔がある。

リハチェフが抱えている荷物をロックマンはじろりと見た。リハチェフが助手席に乗りこむと口を開いた。

「何だ、それは」

「別に何でもない。日本に届けるよう頼まれたんだ」

リハチェフは首をふった。鎖を目立たなくするため、黒いビニール袋で包みをおおっている。

「ヤバイブツか」

「ちがう。ただのみやげものだ」

こちらが恐がっていると、ロックマンに知られたくなかった。リハチェフはわざとぶつきら棒な口調でいった。

ロックマンは無言で頷いた。猫背をさらに丸めるようにルームミラーでうしろをのぞき、セダンを発進させた。長身のロックマンには小さすぎる、コンパクトカード。

「ブツは？」

煙草に火をつけ、リハチェフは訊ねた。

「トランクだ」

ロックマンは言葉少なにいった。

サハリンの内陸部にあるユジノサハリンスクには空港しかない。日本に向かう定期旅客船は南端のクルスコフか西岸のホルムスクから出港する。オタルに向かう船はホルムスクからでる。クルスコフからはワツカナイいきだ。

オタルとワツカナイを比べると、圧倒的にオタルの方が都会だが、ロシア人にとってはワツカナイの方が歩きやすい。オタルは観光地なので日本人の観光客も多く、レストランなども店によっては「ロシア人お断り」の貼り紙が掲げられているからだ。

だが去年からリハチェフはワツカナイよりオタルに行くことが多くなっていた。理由は簡単だ。以前はゆるやかだったワツカナイの税関が、人員を増やしてうるさくなったからだ。リハチェフが日本にもちこむのは、海産物ばかりではない。税関に見つかれば逮捕されるような品も含まれている。

今回もそうだった。この車のトランクにはメタンフェタミンの錠剤が積まれている筈だ。



メタンフェタミンのことを日本人のヤクザは「シャブ」という。シャブ、妙な響きの言葉だ。車がバウンドし、リハチエフはドアにつかまった。サハリンの道路は穴だらけだ。たいして離れてはいないがホルムスクまで二時間近くかかるだろう。

リハチエフがドアにしがみついても、ロックマンはおかまいなしだった。猫背をさらに丸めるようにして運転に専念している。

だが苦手なこの大男に話しかけられるよりはましだ。リハチエフはため息を吐き、日本に着いてからのことに頭をめぐらした。

シユステルキのワシリーが裏切ったというボスの話は意外だった。確かに近頃内務省はうるさくなっているが、ワシリーはいったいどんな弱さをお巡りにつかまれたというのか。大男のワシリーはリハチエフと似て、どこか気の弱いところがある。人殺しだけはしたくないと、常づねいつていた。

だが人殺しを嫌がっていたら、マフィオジの中で出世はできない。それはわかっている。だから皆、ボスの前では、いつでも誰かを殺しにいきませ、という顔をしているものだ。

ワシリーが裏切ったとすれば、ボスから誰かを殺せといわれ、それが嫌で裏切ったとしか考えられない。

もしワシリーを消せ、とボスに命じられたら自分はどうするだろう。

リハチエフは深々と息を吸いこんだ。そうなる可能性はゼロではない。今のところワシリーは内務省にかくまわれているだろうが、お巡りたちはいつまでもワシリーを守らない。

裏切り者は生きていられないのがマフィオジの掟だ。自分に消せという命令が下るのは、あり

えないことではない。

オタルに着いたら、何のかのと理屈をつけてしばらくロシアに帰るのをひきのばした方がいいかもしれない。

オタル行きの船に乗ってしまったえばこちらのものだ。十八時間ほどの船旅のあいだに、幼馴染みのユーリからの頼みごとも果たせるだろう。

そこまで考えて、リハチエフは奇妙なことに気づいた。ホルムスクからオタルに向かう船は、通常、夕方に出港する。だが今はもう夜だ。

「船は何時にでるんだ？ イワンコフ」

ロックマンは返事をしない。車はユジノサハリンスクの市街地を抜け、まっ暗な郊外を走っている。

「イワンコフ——」

「何だ」

ロックマンの口調はいらついていた。内心びくつきながらも、リハチエフは訊ねた。

「オタルいきの船はいつ出港するんだ？」

「明日の昼だ」

「明日だって？ じゃあ俺たちはどこに向かっているんだ。別に今日、急いでホルムスクに向かう必要はないだろう」

ロックマンはまた答えない。リハチエフは不安になった。

ロックマンが不意にハンドルを切った。ホルムスクに向かう道を外れ、舗装されていない側道

へと車を進めた。

「どうしたんだ」

「小便がしたい」

ロックマンは答えた。

「何もわざわざ道を外れる必要はないだろう」

「以前、俺の知り合いが道ばたに車を止めて小便をしていた。我慢できなかったんだ。そこへパトカーが通りかかった。お巡りは嫌がらせのつもりでパトカーを止め、知り合いに職務質問をした。だがそいつはポケットの中にヘロインと注射器をもっていた——」

ロックマンは珍しく長く喋った。

「いいか、トランクには、オタルの取引先に渡す、メタンフェタミンが二キロ入っている。お巡りに見つかったら、俺もお前もつかまる。さもないやワイロを絞りとられる」

「わかったよ」

幹線道路を外れた側道には、動かなくなり捨てられた車が何台も転がっている。それらの車のほとんどが日本製の中古車だ。日本人ならもう乗らないような古い車を山のように船に積んで、ロシアの漁船がもち帰ってきたものだ。

そういった安い車をリハチエフは扱わない。以前は扱っていたが、最近は組織とヤクザのあいだで高級車を扱う契約がまとまり、中古でも値の張る4WDやベンツなどをロシアにもち帰ることが多くなっていった。それらの高級車は、金貸しをしているヤクザが借金のカタにとったものだと聞かされているが、間に入るパキスタン人の車屋にいわせればほとんど盗んだ車らしい。

ナンバープレートを外しエンジン番号を削りとってしまえば、日本の警察も手をだせない。日本の警察はロシア人とかかわるのを嫌がっているように見える。

日本人は外国人が苦手なのだと、パキスタン人に教えられたことがあった。特に相手が日本語を話せないとわかると、警官も面倒がつてうるさくしてこないらしい。

ロックマンが車を止めた。

周囲はまっ暗だった。放置された車が何台も「壁」のように積みあげられている。

「ここならよし。お前も小便しろ」

ロックマンはいつて、ドアを開けた。

「俺はしたくない」

ロックマンはリハチエフをふりかえった。

「するんだ。ホルムスクまでもう止まらない。車の中で小便をもらされちゃ困るんだよ」  
有無をいわさない口調だった。

リハチエフはしかたなく車を降りた。海が近いせいでシベリアほどは雪は降りつもっていないが、それでも靴が沈む。ロックマンは車のヘッドライトを点したまま、道ばたに積みあげられた廃車に歩みより、ツィードのコートのボタンを外した。廃車の壁にも凍てついた雪がこびりついている。

リハチエフはあたりを見回した。風向きのせいでロックマンの反対側の道ばたには雪の吹きだまりができています。そこへ足を踏みこめば、ずつぽりとはまってしまいそうだ。やむをえずリハチエフはロックマンのかたわらに立ち、ファスナーをおろした。

ロックマンが用を足し終わり、コートの前を閉じた。反対に寒さに縮こまつたりハチエフのはなかなか用を足さない。ロックマンをいらつかせるのを恐れ、リハチエフは気持ちを集中した。

ようやくチョロチョロと始めたときだった。かたわらに立っていたロックマンが身じろぎし、リハチエフは首を巡らした。

マカロフの銃口がリハチエフの顔を狙っていた。

「ポリソビッチの頼みだ。ワシリーはお前の名前を吐く。お前を消さなけりゃ奴の組織が危ないとさ」

凍りついたリハチエフにロックマンは告げた。淡々とした口調だった。

そんな——。思った直後、銃口が火を噴き、リハチエフの意識は途絶えた。

#### 4

大塚の携帯電話が鳴ったのは、クラブ「コルバドール」のカウンターに腰をおろしたときだった。カウンターの奥にはポトルラックを兼ねた鏡が貼られており、その鏡ごしにボックスにすわった高森たちのようすがうかがえる。

「コルバドール」は、去年の十一月にすすきのに開店した高級クラブだ。ママは東京の銀座にいたというふれこみで、確かに垢ぬけているし、客あしらいもそつがない。

内装も豪華で、三十人ほどいるホステスの三分の一は、道外からやってきた女たちだった。残

りがすすきのの他店から集めたホステスで、うち三人はロシア人だ。

大塚がこの店にくるのは三度目だった。いつもひとりできてカウンターにすわり、安いウイスキーの水割りをすすする男を、ママの片岡さやかは一人前の客とは見なしてはいないようだ。挨拶してきたこともなく、つけられるホステスはいつもロシア人だ。

外様にしては強気の商売だが、それには理由がある。「コルバドール」の経営母体は丸川興産という、東京に本社をおく不動産開発会社で、丸川興産は広域指定暴力団陽亜連合のフロントだ。

つまり「コルバドール」は陽亜連合のもちものなのだ。

不況がつづく中、北海道の景気低迷は、全国でも最悪レベルといわれていた。そんな北海道に、すすきのとはいえ高級クラブをオープンして、とうていもがとれるとは思えない。陽亜連合の目的は別にある、と大塚は見ていた。

マネーロンダリングにちがいない。

さすがに三度目ともなると、バーテンダーも大塚の顔を覚えている。会釈したバーテンダーに片手をあげ、大塚は携帯電話を耳にあてた。表示された発信者の番号には見覚えがある。国井だった。陽亜連合の下部組織、道北一家に去年までいた男だ。渡世の不義理があったとかで破門されたのが、去年の六月だ。

「大塚さんですか、国井です」

「久しぶりだな。どうしてる?」

「まあぼちぼちです。いろいろありましたが、拾ってくれる人がいたんで、なんとか食いつないですよ。今、どちらですか」

「すすきのだ。会社帰りに一杯やろうと思つてね」

大塚は答えた。まさか「コルバドール」に在るとはいえない。破門された身とはいえ、国井は道北一家とはまだつながりがある。大塚が、「コルバドール」に出入りしていることを知られるわけにはいかなかった。

「実は折り入ってお話があるんですが」

国井の声が低くなった。背後のボックスで大きな笑い声が弾け、大塚は正面の鏡に目を向けた。シャンペンのボトルが開けられ、ホステスが嬌声をあげている。

「急ぎか」

「そう、ですね。できりや今夜中がいい」

気をもたせるような口調だった。

「今日は特別の日だから、お祝いね」

着物を着た片岡さやかグラスを掲げているのが聞こえた。

大塚は鏡を注視した。特別な日、とは何のことだ。

「何の日？ ママ」

ホステスのひとりが訊ねた。

「誕生日だっけ？」

高森の連れの男もいう。いかつい体をダークスーツで包んでいて、ひと目でやくざとわかる。

高森のボディガードだった。四年前、陽亜連合は北海道に上陸するや、札幌、小樽、稚内に事務所をかまえた。道北一家を含む三つの地元暴力団がそのときにはすでに傘下に入っていた。

高森は札幌本部長として、東京と札幌を月に二度往復している。大塚が「コルバドール」を訪れるのは、高森の動向を探るためだった。高森が「コルバドール」で「接待」する人間をつきとめるのが目的だ。これまでに道外の水産会社と回転寿司チェーンの役員を高森は伴ってきていた。いずれも陽亜連合の北海道におけるシノギに深くかかわっている者たちだ。

「ちがうわよ。誕生日なんて、誰だつて年に一度はくるでしょう。でも今日は四年に一度しかない、特別な日よ。もし同じ日に会おうと思つたら、四年は待たなきゃいけないのだから」

さやかが答えた。なるほど、と高森が唸り声をたてた。

大塚はふつと息を吐いた。クラブのママにとつては閏日も乾杯の理由になるというわけだ。今日の高森は、ボディガードを含め、総勢六人できている。席についているホステスは八名。あわせて十四人なら、一本八万円はするシャンペンが四本は空くだろう。高森がこの店でつかう金は、ロシアマフィアとの取引で稼いだものだ。それが丸川興産を通して陽亜連合に入ること、洗われる。

「——大塚さん」

国井の声に現実に戻された。

「今どこにいる？」

「千歳です。なんせ札幌はところばらいの身ですから。すすきのなんてとうてい近寄れません」  
国井はいった。大塚は腕時計をのぞいた。九時を数分過ぎたところだ。千歳までなら車で一時間とはかからない。

「じゃあ十一時頃でどうだ」

「けっこうです。『マリー』ってバーがあります。そこで」

千歳にも小さい飲み屋街がある。千歳基地に勤務する自衛隊員を主に相手にしている。

「了解。あとで会おう」

大塚は告げて電話を切った。それを待っていたかのように、

「いらっしやいませ」

流暢な日本語で声をかけ、ロシア人の女が隣のストウールに腰をおろした。

「やあ。ええと、ジャンナ」

「はい」

女は頷いた。二十五、六歳だろう。ロシア人にしては小柄で、黒い髪を短く切っている。ボーイッシュな雰囲気あまり人気を呼ばないのか、大塚のような大切ではない客の席ばかりにつけられている節がある。

だがよく見ると、青と灰色の混じった瞳は理知的で、小造りながら鼻の形も整っていた。

「大塚サン、これで三度目ね」

ジャンナはいった。

「そう。ここにくるといつも君が相手だ」

ジャンナの目に不安げな色が宿った。

「わたし嫌い？ チェンジする？」

「いやいや、そうじゃないんだ」

大塚は急いで首をふった。ジャンナはロシア人であるがゆえに、大塚の仕事などを詮索しない。

むしろそれは好都合だ。

「君がいい。いつも同じ人で、ほっとするといったのさ」

「ホントに？」

ジャンナは疑うように大塚の顔をのぞきこみ、大塚が本当さと頷くと、ぱつと笑顔になった。

「よかった。このお店、わたしのことあまり好きじゃないお客さん多くて」

「そうかい」

「ママ、わたしに金髪にしなさいっていう。それでもっと長くしなさい。でもわたし、この髪の毛が好き。日本人、金髪好きね」

「白人、という感じがするからだろうな」

「だったら日本人も皆、金髪にすればいい」

「似あわないんだよ。日本人の肌の色には」

答えて、大塚は再び鏡を見つめた。

高森たちのグループに新たに二人の客が加わったのだった。ひとり日本人だが、ひとりは白人だ。おそらくロシア人だろう。

ジャンナは大塚の視線の先に気づいた。ホステス用の小ぶりのグラスに、大塚がキープしたボトルからウイスキーを注ぎながらいった。

「あの人、前にもきた」

「どの人？ あのロシア人？」

ジャンナは頷いた。そして作った薄い水割りの入ったグラスを大塚のグラスにあて、

「いただきます」  
といった。

大塚はロシア人の客を見つめた。四十代の初めくらいだろうか。ひきしまった体つきで、白いハイネックのセーターにキャメルのブレザーを着こんでいる。青々としたヒゲのそり跡が印象的だ。髪は短い金髪で、スポーツ選手のような雰囲気がある。

連れの男は見覚えがあった。北海道内で中古車販売業のチェーンを経営している人物だ。地元テレビでも深夜にコマーシャルが流れている。

「なかなかカッコいい人だな。ロシア人というと、大男が多いが……」

大塚が鏡を見つめようと、ジャンナは首をふった。小声でいう。

「あの人、恐い人。わたしあまり話したくない」

「恐そうに見えないが。船員じゃなさそうだ」

すすきの高級クラブでロシア人を見かける機会はそう多くない。ロシア人が飲み歩くのは主に、小樽や稚内のような港町だ。

「オイルカンパニーにつとめるといってた。でもわたし信じない」

ジャンナは低い声でつづけた。

「ついたことある？」

大塚が訊ねると、ジャンナは頷いた。

「でも秘密。お客さんのこと喋るの、よくないね」

「そうだな」

話を合わせ、大塚はいった。日本に出稼ぎにきているロシア人ホステスは多かれ少なかれ、ロシアマフィアとつながっている。根掘り葉掘り訊くのは、かえって怪しまれる。

大塚が煙草をくわえると、ジャンナはライターの火をさした。前に会ったとき、日本にきて一年半だといっていた。わずか一年半で日本語をここまで上達させるのは、かなり賢い娘にちがいない。油断は禁物だった。

「ジャンナ、下の名前は？」

「ティモシエンコ。ジャンナ・ティモシエンコ」

「モスクワからきたのかい」

ジャンナは首をふった。

「サンクトペテルブルク。昔はレニングラードといいました」

「聞いたことがある。確か有名な美術館があったね。ええと……」

「エルミタージュ。わたしすぐ近くの学校にいきました」

「学校？」

「アート。ジーワピシ。え」

絵のことだ。

「絵画？」

「そう。絵の歴史とか勉強しました」

「美術が好きなんだ」

「好きです。でも美術の勉強、ロシアではお金になりません。だから日本にきました。日本で働

いてお金を貯めて、パリにいけます」

「なるほど」

「近代美術館、いったことありますか」

「札幌の？」

ジャンナは頷いた。

「いや——」

大塚は首をふった。あることは知っていた。確か中央区のどこかだ。

「美術館なんてもう何年も行ってない」

「大塚サン、ドッサンコ？」

訊かれ、道産子を意味していると気づくのに数秒かかった。

「ちがう。十八からこつちだ。それまでは東京にいた」

「東京!？」

ジャンナは目を大きく開いた。

「すごい。どうして北海道？ 仕事？」

「北海道に憧れてた。広い。地平線が見られるようなところは、日本では北海道しかない。それに夏の暑いのが苦手で、北海道は涼しいから」

「ああ、そう。わたし一度、夏、東京いったよ。上野の国立美術館いきました。暑くてびっくりしました」

ジャンナは顔をしかめた。

「まるでスチームバスでした」

「だろ、東京の夏はむし暑い」

頷きながら大塚は水割りを口に運んだ。東京を捨てたのは、暑いのが苦手だからだけではない。

夏を嫌いになった。あのできごとがあったから。十四の夏に起こったできごとのせいだ。以来、自分は夏を憎み、夏の暑さを嫌い、東京を捨てた。

高校を卒業し、北海道の大学に進学したのも、東京の夏から逃れるためだった。

とにかく暑くないところにいきたくかった。

全身に水蒸気がまとわりつくようなむし暑い夏は、十七年前のあのできごとを、どうしても思いださせる。

大学をでた大塚は両親の求めで一度東京に戻った。そして当時の厚生省麻薬取締官事務所の採用試験を受け、合格した。研修を経て麻薬取締官に任命されたとき、任地に北海道を希望した。

省庁再編で、厚生労働省麻薬取締部とその名称が変わった麻薬取締官事務所の北海道地区事務所は、札幌市北区の合同庁舎に所在する。

麻薬取締局

麻薬取締官事務所は戦後、アメリカのDEAをモデルに創設された司法組織である。取締官は司法警察員の身分をもち、捜査権、逮捕権、拳銃の携帯を、社会法の「麻薬及び向精神薬取締法」第五十四条で認められている。司法警察員ではあるが、一般警察官とはちがいで、厚生大臣に任命される国家公務員で、捜査権の範囲も所属する地区事務所には縛られない。

とはいえ、その人員は、全国十二ヶ所の取締部、支所をあわせても二百名に満たない、ごく限られた組織である。北海道厚生局麻薬取締部にいたっては、十名ほどという、小所帯だ。

大塚は三年前二十八で、ようやく希望していた北海道に着任することができた。それも関東信越厚生局取締部からの出向という形だ。これはもともと所属先である関東の取締部の捜査一課長の指示による。

かねての北海道いきを希望していた大塚に一課長の菊村が、「それならばらく北海道を手伝って、ロシアマフィアの情報でもとってこい」

と理解を示してくれたからだ。関東では、北朝鮮ルートへの締めつけで減少する覚せい剤に反比例するように、ヨーロッパでもちこまれる合成麻薬MDMAの押収量が激増していた。

MDMAは、覚せい剤の主成分であるメタンフェタミンとカフェインを合成したもので若者の間では「エクスタシー」「バツ」などと呼ばれ、この十年で押収量が激増している違法薬物だった。注射や蒸気吸入といった、手間のかかる覚せい剤に比べ、錠剤を嚥下するだけで作用することから、爆発的に流行した。

麻薬取締部では、このMDMAの密輸入ルート解明に苦慮していた。ルートといってもひとつではない。MDMAは、日本より先に、中国やタイでも流行した。中国では「搖頭丸」と呼ばれ、服用した若者がディスコで狂ったように頭を振ることからこの名がついた。

日本でも初めは、不良中国人のあいだでの使用が報告され、密入国中国人がもちこむものと思われていた。がその後、中国人が服用する「搖頭丸」は、中国国内で製造された「コピー」で、オリジナルは、イギリスやオランダなどで製造されていたことが明らかになった。ヘロインやコカインなどに比べると違法ドラッグとして「新顔」のMDMAは、その原材料が、植物成分では

なく化学物質であることから、従来とは異なる密造組織の存在がうかがえた。

そこで可能性が高まったのが、北海道及び日本海側に寄港するロシア船を使った密輸入ルートだ。

ソヴィエト連邦崩壊後のロシアにおける、マフィアの勢力拡大は、もはや国家規模に達している、といわれている。政治、経済、軍事のあらゆる分野で、大小、数えきれないほどのマフィアグループが違法な利益をむさぼっているのだ。

ロシアマフィアは、近隣の中国、中央アジア、ヨーロッパだけでなく、日本、そしてアメリカにまでその影響力を及ぼし始めている。

日本では二十年近く前から、ロシア漁船による日本製中古車の積みだしという形で、ロシアマフィアの侵食が始まっていた。

カニやウニなどの漁獲物を日本の港に水揚げしたロシア漁船が、日本では商品価値のなくなった中古車を、船員の「携帯品」として船べりからはみだすほど積み上げ、サハリンやナホトカ、ウラジオストクなどにもち帰る光景は、現地の人間には見慣れたものだ。

これらの中古車貿易を監督する者は「キダリシチキ」と呼ばれ、大半がマフィアの末端構成員だった。

やがてロシア経済が極端な二分化傾向を示し始めると、高級車の需要も増え、今度は価値の低い中古車だけでなく、高級な4WD、あるいはセダンも「商品」となった。これらの「商品」を供給する側に、自動車窃盗グループを傘下におく、日本の暴力団も含まれていた。寒冷地仕様の高級車が次々と盗まれ、ロシアに輸出されていたのだ。



貿易とはしかし、決して一方通行では終わらないものだ。これら高級車の代金として、ロシアマフィアから供給された、カニ、ウニ、エビなどは、表向き合法の水産物ビジネスルートにのせられる。

大塚が「コルバドール」で見た、水産会社や回転寿司チェーンの人間は、その合法ビジネスの「取引先」である。

だが当然、非合法の水揚げ品もある。武器、麻薬だ。

ロシア製マカロフ拳銃は、社会問題にまでなった旧ソヴィエト軍制式拳銃トカレフの後継モデルとして生産され、日本国内に大量に密輸入されている。

また覚せい剤の主成分であるメタンフェタミンも、大麻樹脂やヘロインなどとともに上陸している可能性があった。

違法薬物の換金性の高さは輸出入にたずさわる双方にとって大きな魅力である。たとえばタラバガニ一杯は、その重さで換算するなら、百グラムがせいぜい数百円である。しかしメタンフェタミンなら一挙にその価値は一万倍以上になる。グラム単価で計算するなら、純金よりもはるかに高い。しかも水産物のようにかさばることもない。

大塚が菊村に命じられたのは、こうしたロシアマフィアの薬物輸入ルートの情報収集だった。

総勢十名ほどという小所帯では、大がかりな搜索や逮捕といった活動はめったにおこなえない。

大規模な「捕りもの」になると、仙台の東北厚生局や関東の応援を仰がなければ不可能といつてよい。それだけに「ガサをかけてブツがでませんでした」は許されない。

情報収集は、念には念を入れてあたることになる。

東京都出身で、着任して三年という時間の短さが大塚には有利に働いた。地元の暴力団員や道警の人間にもまだ「面が割れていない」からだ。

大塚は短時間のあいだに、北海道におけるロシアマフィアと日本の暴力団との麻薬取引の実態を学んでいた。

だが検挙にまでにはなかなか至っていない。それはロシア側の情報が極端に少ないことが理由だった。

ひと口にロシアマフィアといっても、その組織は単一ではない。民族や親分子分の系列などで、実数は誰にもつかみきれないほど多い。

ロシア人、グルジア人、チェチェン人、さらにはアゼルバイジャン、ラトビアなど。

出身地や民族で固められている組織もあれば、有力なボスの下に利益だけを求めて集合している組織もある。中でもチェチェン系とカレイスキー系のマフィアは活動が苛烈なことで知られていた。いわゆる「武闘派」で、しかもその矛先は、対立組織だけでなく司法関係者やマスコミ関係者にも躊躇なく向けられる。

さらには軍や警察組織の腐敗が事態を複雑にしていた。たとえ公的な要請をしても、ロシア極東地域の司法関係者から日本の司法関係者に犯罪に関する情報が与えられることはめつたになく、またこちらから情報を与えればそれはそのまま、対象となる犯罪組織に筒抜けになることを覚悟しなければならぬ。

たまにロシア側が協力的な姿勢を見せるときは、相手側の有力者が組んでいる組織の対立組織が対象であったりする。自治体や司法機関の責任者がマフィアにとりこまれてるのは「常識」

なのだ。

日本側にも複数の暴力団があつて、それぞれが複数のマフィアと取引関係を結んでいる状態だ。

だが少数の大組織と傘下組織によつて統合が進みつつある、日本の暴力団のほうがはるかに実態の把握はたやすいといえるだろう。

問題はもうひとつある。

麻薬以外の犯罪、拳銃や密漁水産物の取り締まりにあたるべき、北海道警察の危機意識の低さだった。

中国人の犯罪組織、いわゆる中国マフィアに対する警察の危機意識は高い。

それは彼ら中国人が多数日本国内に居住し、日本人を対象とした犯罪に手を染めていることからきている。

それに比べると、日本国内に居住しているロシア人は少なく、密入国者は決して多くない。

日本に上陸する、末端のロシアマフィアは多くが船員手帳をもち、これをパスポートがわりに使う。短期間の上陸で仕事をすませ、またロシアに帰っていく。そのせいも、殺人や強盗のような重犯罪がロシア人によつて日本でなされるケースがまだ少ないのだ。

悲しいかな、事前に犯罪の情報を収集する麻薬取締官に比べ、警察が動くのは常に事後だ。そのことが、北海道警の動きを鈍らせているのだった。さらに多くのロシアマフィアは、英語は喋つても日本語は喋らない。

現場警察官が嫌がる理由だ。

言葉が通じなければ職務質問も思うようにできないし、かりに犯罪の証拠を発見しても、取り調べに伴う書類の作成などの手間がかかる。

しかもロシアマフィアの多くは、車の取引に関しては、日本の暴力団とのあいだに、パキスタン人などが経営する中古車業者を介在させている。

違法な取引があつたとしても、その説明は困難で、ロシア人やパキスタン人が本国に帰つてしまえば先に進めることができない。

実はそうした複雑さこそがロシアマフィアの凶悪さの元凶なのだと思つていた。

大きな集団を形成することなく、ピッキングや強盗などの犯罪をはたらき、稼ぎがたまれば本国に帰る中国マフィアは、いわばセミプロの犯罪者だ。日本にいるときはプロであっても、中国に帰れば正業に就くアマチュアも多い。

それに比べロシアマフィアは、完全なプロの集団だ。日本であろうと本国であろうと、彼らは非合法品を扱い、必要ならば人を殺し、殺させる。しかも犯罪の発覚を防ぐために、巧妙で複雑な組織を作りあげている。日本における「実害」が少ないのは、見せかけに過ぎない。

おそらくは、北海道警察の現場警察官たちはそのことに気づいている。ロシアマフィアの跳梁を許せば、やがては取り返しつかない事態となることを予感していない筈はないのだ。

しかし決定的な大事件が起こるまでは、彼らが本腰をいれてロシアマフィアを追及することはできない。ロシアマフィアの管理のもと貿易の対象となる、水産物や中古車などは、北海道の経済にも深くかかわっている。それだけに追及するとなれば、関係方面の圧力や逆風も想定されるからだ。

警察は大組織であるがゆえに、受ける向かい風の強さも大きくなる。まかりまちがえば、現場の捜査官は「パンドラの匣を開けた」として自分の首が危うくなりかねない。

よほどのことがない限り、ことロシアマフィアに関しては北海道警の協力は得られないと、大塚は覚悟していた。

それだけに情報収集は慎重におこなわなければならない。一步まちがえれば、大塚本人が密殺の対象となる。

だがおとり捜査、潜入捜査は、麻薬取締官のお家芸である。歴代の先輩たちは、身分がばれば即殺されるという、危険な捜査に従事してきたのだ。

大塚とて、そうした捜査法は叩きこまれてきている。どれほど危険であろうとやっつてのける自信はあった。

それこそが、東京の街に訣別することを決意した、十七年前の夏におこったあの忌まわしいできごとに対する、自分の落とし前のつけ方なのだった。

ジャンナととりとめのない話を交わしているうちに高森らの一行は腰をあげた。聞こえてくる会話によれば、今夜はあのロシア人を接待する予定のようだ。

ロシア人は片言だが日本語を喋っている。同席する中古車販売業者は「ボリスさん」とロシア人のことを呼んでいた。

ボリスはシャンペンを含め、かなりの量の酒を飲んでしたが、酔っているようすを見せなかった。それどころかときおり警戒するような視線をあたりに投げかけている。

それはとりもなおさず、高森や陽垂連合に完全に心を開いてはいない証にちがひなかった。

——今度、東京に招待しますよ。すすきのにもきれいな子が多いが、東京はもつと美人がそろっている。

高森がそういつても、ボリスは表情を崩すことはなかった。

——とても楽しみデス。

と答えるにとどめている。

高森がでていって五分後、大塚も立ちあがった。

「大塚サン、帰る？」

「ああ。まだ仕事の打ち合わせがあつてね」

ジャンナは小さく頷いた。

「大塚サン、いつも高森社長と同じ日ね」

「え、誰？」

大塚はとぼけた。

「さっきのロシア人ときてた人です。この店のオーナーの、そのまたボス。高森社長がくる日に大塚さん、よくくる」

「それは偶然だろう。その高森さんて人はいつもここにきているのじゃないかい」

「そうね、毎日くる。札幌にいるときは」

ジャンナは大塚の目を見つめていった。

「いいな。俺もそんな金持ちになりたいよ」

大塚が軽口を叩くと、ジャンナは首をふった。

「お金持ちになるの大変です。ロシアでは、お金持ちは悪い人が多いよ。わたしはお金なくとも、いい人が好き」

ストレートな言葉だった。日本人のホステスなら思っても口にはしないだろう。

大塚は虚をつかれたような気分になってジャンナを見返した。

「そう、だね。確かに悪いことをしてまで金持ちになろうとは思わない」

「昔、ロシアはお金がなくとも、幸せに生きていける国でした。今はちがう。お金がなかったら、みじめ。私のお母さん、学校の先生してたけど、よくいます。昔の方がよかったよ」

「日本だってお金がなければつらいこともある。もちろん、ロシアほどではないかもしれないけれど」

ジャンナは真剣な表情を浮かべていた。だが一変して、笑顔になった。

「ごめんなさい。難しい話するのよくなかったね」

「いや、そんなことはない。また今度ゆっくり、ロシアの話を聞かせてくれないか」

ジャンナは頷き、名刺をとりだすと、もっていたボールペンで番号を書きつけた。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。